令和４年度第１回八戸市美術館運営協議会
会　議　録

日　時：令和４年５月31日（火）15:30～17:30
場　所：八戸市美術館　スタジオ

会　議　録

日　時：令和４年５月31日（火）15:30～17:30
場　所：八戸市美術館　スタジオ
出席者：別紙のとおり
発言内容：

○事務局：本日はお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。
定刻となりましたので、ただいまから第 1 回八戸市美術館運営協議会を開会いたします。 会議に先立ちまして、市長挨拶を申し上げます。本日は熊谷市長及び佐々木副市長が出張のため、まちづくり文化スポーツ部長の前田よりご挨拶申し上げます。

○部　長：本日、委員の皆様には大変お忙しい中ご出席を賜り誠にありがとうございます。また皆様には、委員就任をお願い申し上げましたところ、ご快諾をいただき厚くお礼を申し上げます。さて、八戸市美術館は、文化芸術活動の振興に大きな役割を果たしてきた旧美術館からの流れを汲みながら、アートを介して、ひと、こと、ものが出会い、とも育まれ、共に街を作る「アートファーム」という概念を持った、これまでにない新しい美術館として昨年 11 月 3 日に開館いたしました。開館記念「ギフト、ギフト」では、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、会期途中で休館や人数を制限しての観覧対応を余儀なくされましたが､市内外から１万3000 人を超える方々にご観覧いただいたほか、特徴的な建物の視察に訪れる方も多く、各種メディアでも頻繁に取り上げられております。このように、美術館の開館により、当市に新たな魅力が加わりましたが、令和４年度は、さらなる街の魅力を作り出す好機と捉え、八戸ポータルミュージアムはっち 、八戸ブックセンター、マチニワ等、これまで整備してきた文化施設の有効活用を図るとともに施設間の連携を深め、相乗効果を高めていく必要があると考えております。また美術館をはじめとする文化施設が提供するプログラムを通して、交流人口や関係人口の増加を図るとともに､事業の企画段階から､商店街組合等との情報共有､意見交換に努め、公共施設への誘客が地域経済の活性化に繋がる取り組みを推進してまいりたいと考えております。委員の皆様には、美術館の構想策定や整備段階から関わっていただいており、そのビジョンや事業方針、建物の特性を熟知された方々であります。どうか皆様におかれましては、引き続き美術館の運営事業につきまして、御支援と御協力をお願い申し上げます。 結びに、本日は忌憚のない御意見と御助言を賜りますようお願い申し上げまして挨拶といたします。

○事務局：続きまして、八戸市美術館運営協議会規則第３条の規定により、会長および副会長を選出いたします。 会長、副会長選出までは同規則第 4 条の規定により、市長代理で前田部長が議長を務めさせていただきます。それでは前田部長お願いいたします。

○部　長：それでは会長及び副会長を決定するまでの間、暫時議長を務めさせていただきます。規則では、会長および副会長は委員の中から互選によって定めるとありますが、どなたか御意見ございませんでしょうか。

◆委　員：これまでに引き続きまして、日比野先生に会長、坂本先生に副会長をお願いしたいと考えております。

○部　長：ただいま会長に日比野委員、副会長に坂本委員をご推薦いただきましたが皆様いかがでしょうか。

◆委員一同：異議なし。

○部　長：異議なしということでございます。それでは、会長は日比野委員、副会長は坂本委員に決定をいたします。ここからは、会長に会議の進行をお願いすることとし、私の役目は

ここまでとさせていただきます。ありがとうございました。

○事務局：それでは、日比野会長、坂本副会長、会長席・副会長席へご移動をお願いいたします。ただいま選出されました、日比野会長、坂本副会長より一言ご挨拶をお願いいたします。

◆会　長：御指名を預かりまして、運営委員会運営協議会の議長をさせていただきますのでよろしくお願い致します。この美術館には、準備期間から関わらせていただきまして、コロナ禍ではありましたが、無事にオープンし、素晴らしい展覧会が開催されました。第2弾の展覧会も、先ほども拝見いたしましたが、地元ならではの展覧会で、とても良い展示になっていたと思います。本日は、「これまで」と「これから」の話を委員の皆様方からの御意見いただきまして、より良い美術館の運営のために協議していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

◆副会長：副会長を仰せつかりました、坂本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
地元に新しい美術館を熱望していた市民の1人として、この運営協議会が立ち上がったことを非常に嬉しく思います。旧美術館時代に検討委員会の会長を仰せつかり、何年か経って今日のこの日、運営協議会が開催されることは非常に感慨深いものがあります。昨年 11 月にオープンして、半年ぐらい経過しましたが、市民の皆様がこの美術館のコンセプトを理解して、美術館を活用できるようになることが非常に大事になってくると思いますので、皆さんと共に前向きな検討をしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局：続きまして、会議に入ります前に事務局を代表して、まちづくり文化スポーツ部長の前田と館長の佐藤からそれぞれご挨拶申し上げます。

○部　長：本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。文化芸術が市民生活にとって必要なものであることは改めて述べるまでもありませんが、当市では昨年度、地方版の文化芸術推進基本計画にあたる「文化芸術まちづくりプラン」を策定いたしまして、また新たなステージにおいて文化政策に取り組んでいくところです。その中で文化施設が果たす役割は大きいものがあると捉えておりますし、特に新美術館につきましては、新たなコンセプトのもと、文化芸術に普段馴染みがない方も含めて、幅広く文化芸術に触れる機会を提供する、というコンセプトのもとに運営されていくと考えております。文化政策を進めていく上で重要な施設と認識しておりますので、皆様には忌憚のない御意見を賜りまして、より幅広く市民に利用してもらえる美術館として運営していければと考えております。委員の皆様には引き続きよろしくどうぞ お願いいたします。

○館　長：本日はお忙しいところお集まりいただき、ありがとうございました。今までは、運営検討委員会の委員でしたけれども、「館長」ということで立場が変わりました。運営協議会委員の皆様からの様々な御意見をもとに、美術館の運営をより良いものにしていきたいと思いますし、これまで検討委員会で協議されてきたことでまだまだ実現できてない部分もありますので、一つひとつ進めていきたいと考えています。本日は、今後の企画を学芸員から直接説明させていただきますので、色々厳しい意見も含めて御意見いただければと思っております。今日はよろしくお願いいたします。

○事務局：次に、本日の会議の出席者でございますが、お手元にお配りしている出席者名簿及び席図をご覧ください。また、本会議は、八戸市美術館運営協議会規則第4条第2項により委員の過半数が出席しているため、成立していることを報告します。　なお、会議の公開非公開についてですが、八戸市附属機関の設置および運営に関する要綱第5条第2項におきまして、個人のプライバシー、または政策形成過程における情報等に係る審議内容で、公開することにより当該附属機関の適正な議事運営に著しい支障が生ずるおそれがある場合を除き、会議を公開することとされております。このため、本日は報道関係

者による傍聴・取材を受け付けております。また、会議後に作成した議事録は、発言者名を伏せて、ホームページ等で公開させていただきますので、よろしくお願いいたします。それでは、ここからの議事進行は日比野会長にお願いいたします。

◆会　長：それではまず、次第に従いまして進めていきたいと思います。初めに報告案件のうち、八戸市美術館開館後の状況について事務局から説明をお願いします。

報告１－(1)　八戸市美術館の開館後の状況について

〇事務局：事務局から美術館の開館後の状況につきましてご説明いたします。資料は 1-1-2 になりますが、事前にお送りしておりましたので、今日はスライドで実際に写真をお見せしたいと思います。

美術館は昨年 11 月 3 日にオープンいたしました。開館記念の展覧会「ギフト、ギフト、」は、吉川委員にディレクターをお願いいたしまして、11 組のアーティストのコレクションで構成する展覧会を開催いたしました。委員の皆様にはご覧いただいた展覧会ではございますが、振り返る意味で当時の様子をご紹介します。全館を使って展示をしておりまして、ギャラリー1 から、地元の切り絵作家大西幹夫さんの作品でスタートいたしまして、浅田政志さんの写真、田附勝さんのデコトラ写真、江頭誠さんの毛布の作品、田村友一郎さんの予期せぬギフトなどの作品がありました。どの作品も個性的で非常に面白い作品でありました。会期中には、トークイベントやデコトラ８台が広場に集結して、鑑賞イベントも開催いたしました。オープニングでは、地元の神楽の一斉歯打ちも行っております。

開館時の状況として、先ほど部長からの挨拶にもありましたが、今年１月から会期が終わるの 2 月 20 日まで、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため県の要請を受けて臨時休館の措置を取っておりました。また、会期の後半にオミクロン株が急速に増えたこともあり、来館者が減少いたしまして、最終的には観覧者は 13,000 人でありました。もう少し行きたかったというのが正直なところでございます。今写真に写ってるのは、観覧者 8,888 人達成の時の写真です。八戸だけに「8」にこだわって 8,888 人といたしました。会期中は、県内外から沢山おいでいただきました。 また、社会見学の受け入れも積極的に行っておりまして、圏域の小中学校中心に 14 校、修学旅行でも県内を中心に津軽方面の小中学校の方たちが多く来館されていました。

次にアートファーマーのプロジェクトでございます。一つは、「ギフト、ギフト」の展覧会と連携して、向井山朋子さんによるパフォーマンス作品をアートファーマーと一緒に上演するというプロジェクトです。こちらは、閉館後に約 100 人ほどご来館いただきまして、ジャイアントルームの大きなカーテンを舞台装置として活用し、幻想的な空間の中行われました。もう一つ、建築ツアーガイドでございますが、これは４回ほどの連続の講座になっておりまして、参加者がそれぞれ自分の言葉で、また自分の感じたものを来館された方にガイドすることを行っております。アートファーマー1 人ひとりがガイドする内容が異なるのが特徴で、建築に特化したガイドもあれば、アートファーマーで農夫の格好をして芝居仕立てでガイドしたり、それぞれアートファーマーの皆さんが工夫してガイドされております。参加者は、高校生から 70 代の女性まで幅広い年齢層が参加されております。本講座は、去年の 12 月で一旦終了としましたが、アートファーマーの皆さんからぜひ継続をしたいという声があり、不定期ですけれども、館内で建築ガイドをしていただいております。

次に、学校連携プロジェクトですが、様々な取り組みを行っております。まず、全体会議を開催し、小中高校の図工・芸術の先生たちが一つのチームになっていくところから

スタートします。昨年行った取り組みは大きく三つございます。一つは、このジャイアントルームの巨大な空間を生かして「大きな絵」を制作するプロジェクト。二つ目は、小中高同じテーマで作品を作るプロジェクト、三つ目に美術館新聞部という、三つのプロジェクトに取り組みました。「大きな絵」は、ジャイアントルームで生徒さん達が描き、高さ10mの場所から展示をしました。開館プレイベントには、これを背景として弦楽四重奏を行いました。
次に、共通のテーマを持って小中高の子供たちが作品を制作し、高校生がファシリテーターとなって参加者みんなで鑑賞したところです。美術館新聞につきましては、高校生と小学生が考えスタートしたプロジェクトであり、出来上がった新聞は、市内の小・中学校全校に配布し見ていただきました。また、社会見学につきましては、継続的に受け入れており、雨が降ると弁当広げて食事している生徒さんもいます。展示室内での模写も受け入れており、通常の営業時間中のため、他のお客様がいる中で作品の模写をするなど色々な光景が見られます。大学連携事業につきましては、美術館2階に「八戸学院まちなかラボ」が開設され、同大学准教授佐貫さんによるワークショップルームを行ったり、八戸工業大学講師の東方さんが学生と一緒に「ジャイアント迷路」という大胆な使われ方をしております。ジャイアントルームは、基本的にはフリースペースで誰でも自由に使えるようにしております。Wi-Fi・電源を自由に使い放題になっております。ジャイアントルーム及びテラスは飲食の持ち込み可能ということで、館内に表示をしております。皆様自由にご利用いただくことが多く、こちらの写真のように、ノルディックウォークの団体が美術館を横切りたいということで、50人ぐらいの方々が館内を歩いてテラスから外に出ていった時の写真です。
開館プレイベントでは、仙台フィルハーモニーのミニコンサートを開催いたしまして、演奏家の方々からも「ジャイアントルームの音響が非常に良い」と評価をいただきまして、音楽イベントの空間としても適した空間なのではないかと考えております。
こちらは、浮世絵の鑑賞会をしている横で、美容師さんが着物モデルの撮影をしている風景でして、そのような異なる風景が同時に見られるというような、壁のないジャイアントルームの特徴的な使い方を表していると思います。
次は、書道の団体がスタジオを使用して書の展示と講演をしているなかで、積極的にジャイアントルームにはみ出して利用しているところです。この団体さんからは、「ジャイアントルームにはみ出して使いたい」という相談を受けて許可いたしました。部屋のみに留まらず自由な発想で利用しているのが見受けられます。
こちらの写真は、「社会教育委員会議」という教育委員会の附属機関があるのですが、是非新しい美術館で会議をやりたいということで、営業時間中の一般のお客様がいる中で、開催されているところで、これまでにない形であると思います。
こちらの写真は、ジャイアントルームのフリースペースで、書道の道具を広げて書を始めた方がいました。貸館の申し込みがあったわけではないのですが、我々としては、ジャイアントルームの可能性を探るという意味で禁止はせず、ご自由に使ってくださいという対応としました。ただ、汚されると困るので、新聞紙を提供して養生をさせてもらい、その上で自由に使っていただきました。次の写真は、先ほど紹介したアートファーマーがガイドが終わった後、ポットとお茶を持ち込んで寛いでいるところです。多様な方の様々な行動が同時多発的に行われるところがジャイアントルームの特徴です。
日常的には様々な使い方がされている一方で、昨年のクリスマスには、地元のケーキ屋さんから「サンタトラックを広場に置きたい」と相談がありまして、クリスマスの雰囲気づくりもしていただきました。天気が良い時には、広場にキッチンカーに出店してい

ただいて、買ったものをジャイアントルームで食べている姿も見られます。
先ほど委員の方々にご覧いただきました、約５年ぶりのコレクション展「持続するモノガタリ」ですが、ホワイトキューブを中心に展示しておりまして、特徴としては、コレクションを通してお客様と学芸員がコミュニケーションを図ることができる内容になっております。「モノガタリカード」というカードをお客様からいただくことにより、学芸員が返事を書いて貼りだすという試みです。また、学芸員の顔が見えるように、学芸員の執務場所を展示室の最後に設置しまして、通称「篠原部屋」と読んでいたのですが、お客様にコレクションだけでなく、学芸員も身近に感じていただきたいとこの場所を考えました。
会期中には、アーティストトークや鑑賞クラブ「木夕」を開催し、 まったり鑑賞するという活動もしています。あと「茶会 with 静寂」は作品のモデルになった方がお茶の先生をしておりまして、 お茶を飲みながら、 その後ろにホワイトキューブから作品を持ち出して、先生からその作品の背景についてお話を聞くということもしています。
オープニングの音楽イベントでは、ジャイアントルームの什器を一切片付けて大空間を作り、その中で演奏するというようなことをしており、今後もジャイアントルームの可能性を試すような取り組みをしていきたいと考えております。
また、ゴールデンウィーク中には毎日多彩なイベントを実施してみました。先ほどのアートボードゲーム、館長に建築の話を聞くもの、また、モノガタリ展にちなみまして、美術館のスタッフが持っているコレクションを展示して、その作品を出したスタッフがその展示品について語るという映像展示も行いました。美術館ではどんな人が働いてるか、を皆さんに知っていただく機会になったと思います。
右側の写真は、八幡馬をマスキングテープで彩るもの、打楽器演奏のワークショップなど、様々なイベントを開催いたしました。 市民への貸館も 3 月からスタートしています。絵画の展示や、地元写真家の若い二人組が、「八戸の朝と夜」をテーマとして写真を展示していく中で、音楽ライブ、トークイベントを行う。このような展覧会を若い方々が実施したことで、八戸にもこういう方達が増えてきたのかなと感じています。
今後は、はっちやブックセンター、公会堂などの文化施設と連携する取り組みも確保していきたいと思っていますし、また、中心商店街との連携企画も重要と考えておりまして、まずは馬場のぼる展をテーマとした商店街との連携企画を現在進行中です。
美術館周辺に新しい拠点ができつつあり、一つは美術館西側に民間が整備した「 コワーキングカフェ」でありますが、地元のコミュニティ放送局が入居しており、今年４月にオープンいたしました。また、美術館北側の道路を挟んで向かい側に八戸工業大学さんの「まちなかキャンバスばんラボ」がオープンしております。他にも、パン屋さん、喫茶店が移転しており、美術館ができたことによって街並みも変わってきております。道路についても電線地中化の工事を進めておりますので、この一帯は今後変化していくものと思います。
最後に、５館連携プロジェクトでございますが、青森県内の５つの美術館が連携をして様々な集客をしていきたいと考えております。昨年から、建築をテーマにしたホームページの開設、あるいはトークイベントなど連携して事業を行っておりますので、今後、具体的にプロジェクトが固まった段階で皆様にはご報告いたします。
資料 1-1 の方の後半に記載しておりますが、「来館者の声」というアンケートがあります。「ギフト、ギフト、」の値段設定高いとか、何回でも観覧できるような仕組みがないかなど、様々な意見が出ております。元々計画段階から、美術館の使い方を市民の皆さんと一緒に作りたいと考えていたこともありまして、市民の皆さんの意見を乗り入れて

改善したところが多々あります。
その一つが、「かおパス」というシステムで、「ギフト、ギフト、」では１回払いきりで２回目観る時には、またチケットを買っていただいていたのですが、 今の「持続するモノガタリ展」からは、館内に設置しているサーモグラフィカメラが顔認証システムを搭載してますので、「１回のチケット代の 1.5 倍」を払っていただけると、お顔を登録し、それ以降は顔認証でその方を認識し、まさにかおパスでご観覧いただける、お客様の満足度を高めるような取り組みを始めており、ご好評をいただいております。今後開催する展覧会でもかおパスは継続していければと考えております。以上でございます。

◆会　長： ただいまのご説明で何か意見・質問はございますか。本日は報告事項が 2 件、議題が 1 件となっておりまして、議題の後、時間をとってありますので、もし今のところで気になることがありましたら、まとめて発言いただければと思います。
では、報告事項の二つ目に移らせていただきたいと思います。 次に報告案件の 2 八戸市文化芸術振興推進基本計画について、担当課である文化創造推進課から説明をお願いします。

報告１－(2)　八戸市文化芸術推進基本計画について

〇事務局：それでは八戸市文化芸術推進基本計画の概要説明をさせていただきます。まず、資料の構成ですが、タイトル「はちのへ文化のまちづくりプラン」と書かれております下部分には、計画策定の趣旨や理念など計画の骨子を、右上の表にまとめている部分は、計画の柱であります六つの施策の体系を整理した表で、紙面の下半分は、その 6 本の柱の概要を記載しております。
計画の策定の趣旨でございますが、当市の文化政策に関する方針としましては、平成 27 年 12 月に「八戸市文化のまちづくりビジョン」を策定し、その推進期間を概ね 5 年として、市民の特色ある文化芸術活動の推進や、地域資源の再評価やアートの力を活用したまちづくりの視点で取り組むアートプロジェクトなどの事業に取り組んでまいりました。また、国では平成 29 年に、それまでの文化芸術振興基本法から、文化芸術基本法への改正を実施し、地方における文化芸術の推進に関する計画策定を努力義務としたところであります。これらのことから、国などの動向や、文化芸術を取り巻く社会的背景、当市のこれまでの取り組み、市民アンケートから見える課題などを踏まえながら、文化芸術の総合的な施策を推進していくため、次のステージに進む指針となるべく基本計画「はちのへ文化のまちづくりプラン」を策定したものであります。この計画の構成は 3 部構成になっておりまして、最後に資料編をつけて整えております。構成内容ですが、第 1 部は、計画策定の趣旨や理念などでありまして、国の法整備等の動きや当市のこれまでの取り組み、市民アンケート等の結果、基本理念や施策の体系等を整理しています。第 2 部は、計画の柱であります六つの施策とその取り組み方針となっております。各施策に取り組む基本的な考え方を整理しまして、次に推進していくための取り組み方針を 3 項目掲げ、具体的な主な取り組みを明記しております。文化政策の対象を幅広く網羅・明確にし、目的別の施策取り組み方針と具体的な取り組みを紐づけることにより、政策取り組みの計画性と選択性を高めました。第 3 部は、拠点となる民間と公、合わせて 28 の文化施設について、施設ごとに設置目的や施策の概要、推進する主な取り組みを分かりやすく整理し掲載しています。続いて、基本理念ですが、これは「八戸市文化のまちづくりビジョン」で掲げていたスローガンを継承したものでありまして、文化芸術から市民一人ひとりが受け取る恩恵と、地域社会が受け取る恩恵の両方を大切にする視点を持ち、分野横断的に取り組みを進めることを基本として計画の理念としています。次に

共通する姿勢として、3 つの方針を掲げています。これは、計画全般に共通する姿勢として、基本理念の実現に向けた第 2 部に掲げる施策や各取り組みの実施において、チャンス・ユニーク・ガバナンスの 3 つのキーワードで表現する姿勢を共通の指針として掲げています。方針 1 は、多様な文化芸術の価値に触れる機会を通して、文化芸術の果たす個人や社会にとっての役割を取り直し、考え、共有する機会、チャンスとします。方針には、日本、地方、八戸ならではの独自性や固有性、ユニークさを付加価値として追求し、アイデンティティとして深められるよう取り組みます。方針 3 は、市民主体の文化芸術振興の取り組みをベースに市民セクターと行政が地域づくりを担う共治ガバナンスの実現を目指します。計画期間は令和 4 年度を初年度としまして、計画の基本理念や計画全般に共通する姿勢は概ね 10 年、施策や各取り組み方針は概ね 5 年程度で見直しの検討をするものとしています。さらに、計画の対象範囲と実施主体ですが、行政の取り組みにとどまらず、 市民、アーティスト、文化芸術団体、文化芸術に関する専門的知見や技術を有する方、事業者 NPO など、多種多様な主体が実施する取り組み、あるいはそれらが連携協働して行う取り組みを対象として想定しております。ここからは、計画の柱であります第 2 部の主要施策と取り組み方針についてお話させていただきます。紙面右上の施策体系と書かれた表にありますように、施策 1～6 まで当市が取り組み推進していく文化政策の対象を幅広く網羅しており、一つの施策に三つの取り組み方針を掲げております。 この六つの施策の体系は、施策 1「ふれる・ふかめる～文化芸術に親しむ～」を全体のベースとなる施策に位置づけております。市民による多彩な文化芸術活動の振興や、子供たちが文化芸術に親しむ機会の充実を図ります。そのための文化施設の果たす役割は大きく、鑑賞や体験・創造の場の提供に取り組むこととしています。
次に、テーマ別の施策といたしまして、施策 2「つくる・いどむ～新たな創造への取り組み～」、施策 3「まじる・まざる～文化芸術による共生～」、施策 4「のこす・いかす～伝統の継承と活用～」、これをテーマ別の施策と位置づけております。
アートプロジェクトの実施や、パフォーミングアーツ、クリエイティブビジネスの振興、障害者等による文化芸術の鑑賞や参加など、社会包摂の取り組みや国際交流の推進、ユネスコ世界遺産の縄文文化の発信、地域に根ざす文化、文化財の保存継承と活用などに取り組むとしています。
続いて、環境づくりとなる施策、施策 5「つなぐ・ささえる～担う人・支える人の確保・育成～」、施策 6「あつめる・ひろめる～連携のソフトインフラ～」、この二つの施策を環境づくりとなる施策と位置付けています。対象範囲が広がる文化政策において、担い手が求められる専門性が広がっていることから、専門人材の確保・育成、文化ボランティアの活動振興や、新しい公共・公民連携の取り組みは、地域社会において、文化芸術の価値や効果を発揮するために必要な条件であることから、 多様な主体が連携するプラットフォームづくりや、県や近隣自治体との連携強化に取り組みます。以上が「八戸文化のまちづくりプラン」の概要でございますが、文化事業は成果が定量的に測れるもの ではなく、また数年間という短期間で成果が上げられる性質のものではないことから、中長期の視点に立ち、取り組む必要があります。特に力を入れるものとしまして、将来の文化の担い手・支え手となることが期待される子供たちを対象とした、文化芸術鑑賞や体験などの学びの機会を充実させる取り組み、例えば、文化芸術活動者と学校現場とのマッチングの仕組み作りとか、障害がある方が文化芸術鑑賞や参加するパフォーミングアーツ、舞台芸術事業への取り組み、市内文化情報ポータルサイトの構築や、市の文化事業のアーカイブ誌の発行などによる発信力の強化とファンづくり、市内の文化芸術活動者や学校、県・企業など多分野、異業者のステークホルダーが集い、文化芸術

を通じた情報交換や学びの場となるプラットフォーム事業の立ち上げと運営に力を入れて取り組んでまいりたいと考えております。

また、美術館をはじめ、八戸ポータルミュージアム、ブックセンター、公会堂など、文化事業になる施設が中心市街地に集積立地している優位性を活かし、各施設それぞれの活動が有機的に連携することで、相乗効果を高めることを目指し、当市のまちづくりを推進してまいります。 以上で説明を終わります。

○会　長：ありがとうございました。続きまして、議題に移ります。本日の議題「令和４年度事業計画」について、事務局から説明をお願いいたします。

議題２－(1)　令和４年度事業計画について

○館　長：では、私から全体の話をしていきたいと思います。資料 3-1 令和４年度並びに今後の事業計画ですが、この美術館では、「展覧会」と「プロジェクト」を主軸に捉えて活動を行っております。開館後、半年ほど経過しましたが、今後の課題として三つのことを考えております。

一つ目は来館者層の拡大であります。美術館に来たことのない市民の方々に、どのようにこの場所に来てもらうかが挙げられます。

二つ目は、プロジェクトを実施しているものの、比較的短時間で終わってしまうものが多いので、日常的な開催とすること。特に平日の昼間、ジャイアントルームで活動が行われていないときにどのようなものを見せていくかを考える必要があります。

三つ目は、アートファーマープロジェクトの活発化です。先ほど、副館長からアートファーマープロジェクトについて、いくつか説明させていただきましたけども、今のところ単発のプロジェクトに終わってしまうことが続いていますので、もう少し継続的に活動を行うプロジェクトをこれから計画していく必要があるかなと考えております。今まで通り「展覧会」と「プロジェクト」を組み合わせて進めていく一方で、冬季間である 1～3 月の展示室は貸館で運営をしたいと考えておりますので、その期間にアートファーマープロジェクトの充実を図っていこうと考えています。来年度企画展では、ゲストキュレーター企画がありますが、構成するプロジェクトは今年度から実施していきたいと考えてます。今後の方向性としては、現在八戸にいるアーティストや、八戸市発の芸術活動を発表する企画、場合によっては公募を行うなどを検討しているところです。その後の展覧会については、後ほど担当学芸員が説明します。

３番目のコレクションという意味では、現在色々なプロジェクトを行っていますが、これらのプロジェクトを、今後コレクションに置き換えることも、この美術館では考えていく必要があるのではないかと考えています。プロジェクトで制作したものや、写真、映像をアーカイブしていく。もしくは、プロジェクトで行われたものが常設の展示となっていくなど、色々と考えていきたいと思います。

コレクションラボの運用が本格的に始まっていますが、収蔵コレクションを用いて、展覧会を開催し、それをきっかけとしたプロジェクトを考えたいと思っています。また、新収蔵作品についての展覧会等も計画していきます。今後は、八戸のアーティストコレクションを中心とした展覧会企画等もあり、あとはコレクションのウェブ上での公開の準備を進めています。

学校連携については、活動している内容をどのようにジャイアントルームで見せていくかが課題であると考えています。

広報や政策などについては、小中学校など地域向けた発信をして、Web 上では日々の活動を発信する映像とかの発信、出版物に関しては、毎回展覧会ごとに図録を作っていま

したが、今後も継続していくのか検討したいと考えています。私からの説明は以上です。

○事務局：続きまして、資料 3-2 令和 4 年度美術館運営事業について、今年度の事業の予算規模をご説明したいと思います。資料にありますように、大きく三つ項目ございます。1 点目美術館の企画運営、今年度行う展覧会プロジェクトにかかる予算ですが、全体で 6,630 万 9000 円となっております。これは、今年度の企画だけではなく、来年度の春先に予定しているゲストキュレーター企画の今年度分プロジェクトの活動費用も含まれています。

2 番目の施設維持管理経費は、美術館の維持管理に必要な清掃・警備など各種委託業務、施設の保守点検、修繕等に係る予算ですが、約 1 億 3000 万円を計上しております。三つ目の美術館施設整備費ですが、以前、伊藤委員から、「美術館の備品購入については、開館時に全て揃えるのではなく、開館後にもある程度の予算を確保して、必要なものを必要な時に購入できるようにした方が良い」というご意見をいただきましたので、そのように予算を計上しております。今年度は、この予算で事業を行ってまいります。

次は、それぞれの企画の説明資料になりますので、企画担当の学芸員を紹介する意味でも各学芸員から説明させます。

○事務局：私が担当している「持続するモノガタリ」について、概要は先ほど副館長から説明しましたので、それ以外の部分をご報告いたします。資料 3-4 観覧者数 5 月 9 日現在で 3,146 人とされておりますが、5 月 27 日の時点では 4,000 人を超えてきました。普段から、展示室に行って雰囲気を確認しているのですが、お客様からは好評をいただいています。初めて八戸の文化を知ることができたとか、色々刺激になったなど好意的な意見をいただいております。お客様の年齢層ですがご高齢の方も多いのですが、旧八戸市美術館と比較して若い年代の方に沢山ご来場いただいています。初めて来館したという方もいれば、かおパスを使って、2～3 回目ですというお客さんも多く見られます。展覧会の会期中に金曜ロードショーで「魔女の宅急便」が放送されたこともあって、 SNS で 重点的に告知したところ、教育版画「虹の上を飛ぶ船」を見に来られたお客様が沢山いらっしゃいました。

展覧会の会場で、お話をしてもらう・語ってもらうということをコンセプトに掲げているので、そのための工夫をしているんですが、地元のお客様だとご夫婦やお友達で、「蕪島だよ」とか「墓獅子舞だよ」とか、テーマをご存じであればテーマについてお話もしてますし、その作家のことをよくご存知の方もいらっしゃって、この人は自分とこういう関係でのようなことを私にお話していくようなこともありました。

そのような個人的なお話や主観的な話も美術館としては積極的に聞いていきたい、大切にしたいと思っています。また、お客さんから今後の展覧会に期待する声もいただいていますし、展示方法とかキャプションについての要望もいくつかありましたので、今後の展覧会に活かしていければと考えています。

今回、29 人の作家の紹介に留まり、まだ紹介していないも作家さんいますので後々紹介していきたいと思っています。 また、八戸市美術館のコレクション展の PV と、展覧会の様子をまとめた映像を YouTube で公開していますので、お時間がある時にご覧いただければ幸いです。

○事務局：続きまして、まるごと馬場のぼる展についてご説明いたします。「まるごと馬場のぼる展 描いたつくった楽しんだニャゴ！」は、7 月 2 日～8 月 29 日まで開催いたします。内容といたしましては、絵本「11 ぴきのねこ」シリーズで知られる三戸町出身の馬場のぼるの回顧展です。 展覧会では、絵本の他に元々漫画家だった馬場のぼるの漫画の印刷原稿ですとか、50 年分の大量のスケッチブックに加えて、幼少期や青年期の貴重なノート

や雑誌などの展示をいたします。さらに、馬場のぼるを取り巻く人間関係、やなせたかしや手塚治虫、そのような間関係からも、馬場のぼるの作品や人柄・魅力を紹介する展覧会となっています。彼のユーモアやほのぼのとした世界観を楽しんでいただければと思います。 絵本の巨大展示や、絵本に登場する 11 ぴきのねこが住む家を再現して、実際に中に入ることができる展示も用意しており、大人から子供まで楽しめる企画になっております。

本展は、練馬区立美術館で昨年 7 月スタートしまして、今回の八戸、今年の秋には愛知県の刈谷市美術館を巡回します。八戸会場ならではのオリジナル企画として、三戸町が推進する 11 ぴきのねこのまちづくりを紹介する映像展示、また、八戸市や三戸町の周遊を促進させ連携を図ってまいります。また、関連企画として中心商店街の集客に繋がるような企画も予定しております。

次に運営体制についてですが、実行委員会を立ち上げております。構成メンバーとしては、八戸市、三戸町、デーリー東北新聞社、青森朝日放送、ＶＩＳＩＴはちのへの５者で実行委員秋を組織し、業務を進めております。会場構成につきましては、佐藤館長の大学研究室の学生にご協力いただき進めております。料金につきましては、一般 1000 円、高校・大学生 500 円、中学生以下は無料となっております。 その他、モノガタリ展に引き続きかおパスの導入も予定しております。展覧会の関連イベントとしては、講演会、鑑賞プログラム、図書館での読み聞かせや、八戸市市民大学講座で、 こぐま会社元編集長の関谷さんの講演を予定しております。 3 枚目には練馬美術館での展示会の様子を載せておりますのでご参考いただければと思います。私からは以上です。

〇事務局：次に、「佐藤時啓　八戸マジックランタン」は、平成 26 年から実施していた「写真のまちはちのへ」の事業として、平成 28 年度から写真家である東京芸術大学の佐藤時啓氏を招聘し、地域資源を題材とする写真作品の滞在制作をしていただきました。本展覧会は、その集大成となる展示でありまして、 市内の企業や近隣施設と連携する他、佐藤氏の作品の持ち味でもあるカメラの構造を体験できるプロジェクトを実施する予定であります。会期は、令和 4 年 10 月 29 日（土）から令和 5 年 1 月 9 日（月）までとなっております。展覧会に合わせて、写真集の制作、様々な関連企画は記載の通りですので、ご参考いただければと思います。

〇事務局：次に、2023 年春夏の展覧会「美しい HUG」ですが、この展覧会は、ゲストキュレーターを招いて行う企画となっております。この美術館のコンセプトである「出会いと学びのアートファーム」をより体現し、展覧会プロジェクトという二つの柱で運営していく、この美術館のアイデンティティを確立していくことが狙いとしてあります。ゲストキュレーターには、元水戸芸術館の学芸員で、現在東京都歴史文化財団でディレクターを務めておられる森司さんをお迎えして、現代アートの展覧会とプロジェクトを実施するということにしております。

展覧会は来年の開催ですが、今年度から様々なプロジェクトを始動させることとしており、来月から早速プロジェクトが始まる予定です。「美しい HUG」というタイトルをつけておりますが、様々な異なるもの同士がハグをしていくような機会があったらいいな、という想いを込めております。アーティストと美術館、鑑賞者が作品と出会う、あるいはプロジェクト・展覧会と、様々なハグが生まれるような企画ということを目指しています。

会期は、来年の 4 月末から 8 月お盆過ぎまでという長めの会期を設定しています。アーティストは 6 名を予定しておりまして、青木野枝さん、井川丹さん、川俣正さん、きむらとしろうじんじんさん、黒川岳さん、タノタイガさんの 6 名に参加いただくこととし

ております。 また、業務の進め方として、全体の担当は大澤ですが、アーティスト毎に学芸員、副館長、リーダーも含めて企画運営グループ全員体制であたっています。ゲストキュレーター森さんのキュレーションを学びながら、私達担当も学びと出会いが得られるようにしたいと考えているところです。

すでに始まるプロジェクトのアーティスト、きむらとしろうじんじんさんは、そこに住む人たちとコミュニケーションをとりながら、お茶碗を作ってその場でお茶を飲む、「野点」というプロジェクトを長年行っている方です。来月からお手伝いしてくださるアートファーマーの皆さんへの説明会、野点したい場所を探すというプロジェクトをスタートさせまして、10 月 1 日の本番の予定としております。

また、作曲家の井川丹さんに参加いただいておりますが、地元の小学生や中学生の子供たちが井川さんの作った合唱曲を歌い、その音声をジャイアントルームで流すことを検討しています。以上です。

○事務局：今年度の コレクションラボの事業説明をさせていただきます。コレクションラボでは、収蔵作品を中心に、年に 3 回程度無料の展覧会の実施を予定しております。同時期にホワイトキューブで開催する企画展と関連性を持つ展示や、「ラボ」という名の通り、実験性のあるような展示を行うことで、様々な来館者と美術館のコレクションを繋ぐ取り組みを展開していく予定です。

今年度の展示スケジュールについて、現在開催中の「舟越保武展 静謐の中に佇む」は、6 月 20 日まで開催しております。その後、馬場のぼる展で 7 月から 8 月にかけて使用し、その次は、9 月 10 日から 1 月 16 日までの会期で「（仮称）八戸郷土展」を、1 月 21 日から 4 月 10 日まで「（仮称）新収蔵作品展」を開催予定となっております。

９月からの「（仮称）八戸郷土展」については、地元作家による市内の風景が描かれた作品を展示し、地元作家や地元の風景の美しさを来館した皆様に知っていただけるような展示にしたいと考えております。

展示の他に、地元の風景が描かれた作品展示でありますので、実際にその描かれた市内の景色を探しに行くという街歩きのプロジェクトを予定しています。もう一つは、市内のいたるところに展示された地元作家の作品について、その情報をお客様が書き込めるような大きなマップを設置して、みんなで作っていくマッピングプロジェクトを予定しております。

１月からの新収蔵作品展については、昨年度の美術品等収集委員会で寄贈が決定した作品の展示を考えております。作品一覧を添付しておりますので、後ほどご確認いただければと思います。コレクション事業について説明は以上です。

○事務局：「プロジェクトについて」アートファーマープロジェクト、学校連携プロジェクト、大学連携プロジェクトの 3 つについて説明させていただきます。

アートファーマープロジェクトは、大きくは 3 つの柱がございます。1 つ目は、美術館のアクセシビリティ高めるために、専門家をお招きして、来館者と一緒に考えるミーティングを行うもの。2 つ目としては、きむらとしろうじんじんさんの野点や佐藤時啓展でのリアカーメラプロジェクトなど、アーティストと市民との作品創作活動を行うもの。3 つ目は、建築ツアーガイドのような活動をアートファームプロジェクトの 3 本の柱で展開したいと考えております。

次に、学校連携プロジェクトチームでございますが、小中高の教員と美術館学芸員、専門家が一緒に活動を展開するものでございます。今年度は、プロジェクト内容の検討、昨年も行ったミーティングの継続と、美術館活用プログラムの開発に取り組んでいければと考えています。また、美術館に先生たちが活動するラボを開設・活用していくこと

を検討しています。
3点目の大学連携プロジェクトは、美術館開館前から、八戸学院大学さん、八戸工業大学さん、八戸高専さんとは連携させていただいておりましたが、館内の八戸学院大学ラボ、また美術館向かいの工業大学さんのまちなかラボなどができておりますので、それぞれの施設と連携した取り組みを今後検討していきたいと考えております。

○事務局：資料3の10「ジャイアント食堂」についてご説明いたします。本プロジェクトの演出構成には、「居間 theater」を迎えます。「居間 theater」は、既存の場とそこにあるふるまいをもとに作品創作を行うパフォーマンスプロジェクトを行うアーティストです。
ジャイアントルームの可能性を探るためのプロジェクトとして実施するもので、モノだけでなくコトを満たす新しい形の美術館として、作品を鑑賞するだけでなく、様々な活動が美術館で行われるということを提示することで、美術館やそのコンセプトをより多くの市民の方に感じてもらうことを目的としています。実施するのは6月25日（土）8時から21時までです。 ジャイアントルームに1日だけ現れる不思議な大食堂で、朝から晩まで様々なことが起こります。飲食ブースはもちろんのこと、地元のアイドルグループから本格的なミュージシャンまで、様々なステージが一日中行われています。また、カラオケ大会、ワークショップ、建築ツアー、収蔵者間のこれ当たりものなんですけれども作品展示をしたり、野坂の言葉をもとにしたろうとか、あとは、地元ラジオ局BeFMの協力による公開収録を予定しております。 このジャイアント食堂では、芸術とは無関係なこともたくさん起こるのですが、地元作家の作品であったり、その作家　の言葉に触れたり、その偶然的な出会いや関わり合いの中で、生まれていくことを想起させるというような構成を考えている。一日の中で 、緩やかな音楽の流れを持たせたいということで、ジャイアントルームの空間全体の演出として八戸市出身の大谷義雄さんをゲストに迎えております。 芸術に興味がある人もない人も、食べ物や飲み物片手にお好きなように過ごしていただいて、美術館ことを知っていただき、今後の活動への機会に繋がればと思っております。
本プロジェクトは、東京芸術大学の長島研究室との共催となっておりまして、東京芸術大学さんのプロジェクト補助を受けて実施いたします。

○事務局：最後に資料3-11、ジャイアントルーム・広場活用事業についてご説明いたします。事業の趣旨としては、美術館に行ったことがない、敷居が高いと感じている市民に向け、来館のきっかけ作りとなる取り組みを行い、美術館の雰囲気づくりや賑わいの創出に繋がるものを考えております。内容としては、先ほど説明いたしましたジャイアント食堂が6月25日に予定されているほか、ゴールデンウィーク、夏休み・冬休みなど時期を捉えて様々な企画を行いたいと考えております。
また、クリスマスや正月など雰囲気づくりに取り組みながら、中心街との連携を積極的に推進したいと考えております。
残念ながら、八戸三社大祭や七夕まつりは、今年度もコロナ感染対策で行わないようですが、 中心街での様々なイベントと美術館が連携して活動するような取り組みを行ってまいりたいと思います。
今後、キッチンカーの出店等も検討しておりますが、皆さんから2階のテラスでビアガーデンを行ってはどうかという意見もいただいておりますので、その辺りの企画も検討していきます。事務局から説明は以上となります。

○会　長：ありがとうございました。
ここからは、委員の皆さんから、意見をお聞きしたいと思いますが、まず、私から一つ。
プロジェクトについて事務局から説明いただきましたけども、モノガタリ展、馬場のぼ

る展、佐藤時啓展、コレクションラボ、ゲストキュレーターの展示が行われ、ジャイアントルームからはみ出していくアートファーマー的な活動、この接続が八戸市美術館の特徴になっていくかと思います。年間を通して実施しているプロジェクトが、今後も継続していくと魅力的なものになるだろうなという印象を受けております。学芸員チームが展覧会をまず作る、そしてアートプロジェクトをその後考える、展覧会を作るのはそれなりに準備が掛かりますけれども、アートプロジェクトの部分まで美術館が組織的にプロジェクトとして同時に行う、そこまでチャレンジする美術館はあまりないと思います。展示とアートプロジェクトを同時に行っていく時、担当・体制というのは、担当なのか集団になるのか、その体制を教えていただきたい。

〇館　長：展覧会とプロジェクトを同時にやっていますが、展覧会担当、プロジェクト担当と分けることはなく、基本的には展覧会もプロジェクトも、そのある一つの企画に対しては同じ学芸員が双方をやるという体制です。基本的には主担当が 1 名、サポートの副担当 1 名という 2 人体制で行っていて、チームというよりは、その 2 人のペアを中心に進めていくという形をとっています。その一方で、展覧会に紐付いてないプロジェクトも並行して進めていますので、学芸員やそれ以外のスタッフ含めて全体で担当を分けながら実施する形です。

〇会　長：ありがとうございました。では委員の皆さんから順番に伺っていきたいと思います。

◆委　員：様々な内容についてご説明いただきまして、多文化共生社会の形成推進に対して、展覧会、プロジェクトを含めて、皆様の気持ちを感じました。本学は、美術館の 2 階にサテライトキャンパスを開設させていただきまして、現在は、八戸工業大学、八戸高専と本学で三学連携に取り組んでおり、まず毎月 1 回都市研究検討会を開催し始めたところです。今年度は 5 月から始めておりますが、本日のお話を聞いて大変刺激を受けました。6 月から校内連携とか、近隣の高校生が参加し、高校・大学連携のオープンゼミとか、積極的に美術館を活用して、地域の方々と賑わいづくりをしながら、少しでも貢献できるよう頑張りたいと思いました。

今日の様々なお話を学内で共有させていただいて、本学が関連する様々なプロジェクト・事業を組み立てていきたいな思います。

◆委　員：私は建築が専門で、プロポーザルに関わった経緯がありまして、今回の協議会に参加させていただいております。オープン以来、建築関係者の方の来訪が非常に多いと聞いておりまして、「新建築」という我々建築専門の人間にとっては、最も権威のある雑誌の表紙を飾ったことで、建築の方々を中心にかなり八戸が盛り上がっていることは非常に嬉しく、誇りに感じています。一方、Twitter でも八戸市美術館はかなり盛り上がっているようで、「ジャイアントルームとはなんぞや」とか。私は市民として、使い手として、ジャイアントルームをもうちょっとうまく使えるような方法を何か見出していくことに、是非協力していきたいなと考えております。

本日の会議で取り上げられた点について、資料の 3-1 で、事業計画とこれからの課題で、来館者層の拡大が課題という項目がありましたが、高専の学生を 12 名ほど連れてきて展示を見させていただきました。初めて来たっていう学生ばかりでしたが、おそらく、ある一定の層の人たちが美術館に来ていないと感じました。特に学生層。これまで美術館に縁のない方たちをどのように呼び込んでいくのか、を考えていくことが大事かなと思っています。資料 1-2 で、統計的なデータを出していただていますが、このデータを活用して、新しい来館者層を開拓していく取り組みや展示が考えられるのではと思っています。八戸高専の学生は、アート的な活動をするよりは数字を見せられると喜ぶことがありますので、ぜひ統計データの分析とかそのような作業に協力させていただきたい

なと考えております。

◆委　員：私からは、学校連携プロジェクトに関わってみた感想をお話させていただきます。 八戸市内に中学校は、公立・私立を含めて 26 校ありますが、その公立である市立は 24 校あります。各学校に美術教員がいるわけではなく、例えば本校では、隣の中学校と兼務している状況でありますし、時間講師が 1 人で 3 校回っているところもあります。退職しても新しい教員が入ってきません。

また、美術教員は特別支援学級を受けもつことが多いため、プロジェクトチームに入りませんかと声を掛けても、個別の生徒対応等で時間的に難しいと。しかしながら、今の学校連携のプロジェクトメンバーは、そのような状況の中でも集まったメンバーであります。中学校の美術部会がありますが、その中でもこのプロジェクトチームに関わった先生は半分に満たない状況でした。私がやって良かったなと感じたのは、小中高の校種を跨いだ先生たちの LINE グループで、「黒板アートを企画したので観に来ない？」などというような情報交換をして、互いに切磋琢磨できたことです。その繋がりができ、昨年度は充実した活動ができました。さらに、先日学芸員さんにお願いし、美術研究会の理事会を美術館で開催させていただきました。理事会開催後、展覧会を見学し充実した時間をもつことができました。

企画につきましては、例えば東京都美術館では、メモを書きながら見進める鑑賞カード「ガイドカード」のようなものが小中学生向けにあるのですが、八戸市美術館にも同じようなかわいらしいものがあると、子供たちが楽しんでアートに関わり、好きになってくれるかなと思います。

来年 1 月 27 日～29 日まで市内中学校の生徒美術展があり、これまではっちで開催していたのですが、今年度は美術館でやってみようということになっております。

来年度は県中学校総合文化祭が公会堂で行われます。公会堂全館借りて開催するので、美術館にも足を運ぶような動線を作っていけば、街全体が美術館とリンクしているような流れをつくれるかと思います。

三春屋が閉店して、中心街全体が廃れてしまった感じがあります。美術館だけではなく、まち全体が活性化していけばよいと思います。八戸は文化層が限られていて、芸術的なものに興味・関心がある人がいる一方で、興味がない人は全く見ないというような二極化しているようなところがあるように感じます。無料駐車場がないとか、何か他にお茶を飲めるような休憩所があるなど、興味を引くようなものがないとなかなか難しいかなと。これからのプロジェクトで「野点」がありますが、お着物で来た方にはお菓子一個サービスなどすると宣伝になるのかなと思います。

最後に一つ、私は是川縄文館の土器を作る講座に毎週通っていたのですが、八戸市は縄文文化が盛んなところなので、美術館と縄文館が連携した企画があれば良いのかなと前々から思っています。以上です。

◆委　員：様々な活動をお伺いして、色々な方が美術館に関わっている、そのコンセプトが本当に素晴らしいと思います。今日は担当学芸員さんの案内で、モノガタリ展を拝見しましたけれど、 美術館が収蔵しているコレクションを、すごく新鮮な目線でとても温かい気持ちで見ることができました。また、それを作られた作家の生の姿とか、学芸員さんの言葉とか、生き生きと聞けたことで、その作品に血が通って見えてすごく感動しました。皆さんの「モノガタリカード」を担当学芸員さんが全部を返事しておられると聞きました。アーティスティックな会話には限らず、何か自分の相談をする方もあると伺いました。そういう事がすごく大切だと思っていて、私の世代だと美術館って権威的な所で、見ろよって言われて見せていただく、という関係性がこれまでの美術館だったと思うの

ですが、今回の企画展は、会話・対話をテーマにしていることが、この美術館の姿勢を表しているのだなと私は感じたので、この姿勢は何らかの形で続けていってほしいと思います。
他の美術館の方たちでも、専門家であればあるほど、目を開かされる企画なのかなと思います。その考えでいくと、素晴らしい企画が沢山あるのですが、平日昼間とかは、これだけ色々なこと仕掛けていたら、スタッフの皆さんはすごく忙しいだろうと思います。
私がずっと言っていることですが、家に病人がいる、障がい者がいるとか、そのような方たちというのは、美術館に足を運ぶきっかけも作れないし、行っても自分は楽しめないかと思って、自分で行けないと判断している可能性が高いと思います。
特に、ケアしている側の方がむしろ疲れていたり、深く思い込んでいたり、ケアを受けている人に対しても、ある種の決めつけをしてしまって、例えば認知症と診断された瞬間に、あの仕事はしなくていいなど言われて、今まで普通にできていたことをできなくなってしまう。人間扱いされなくなる。ますます何かおかしくなっていくということがある。私はNPOもやっているので、その当事者たちがそのようなことを話しているのをよく聞きます。
その当事者たちの集まりは、病院とか介護施設のどこかで行われることが多いのですが、それを美術館でできないかと考えています。介護職の方と一緒に当事者たちが集まって、平日の昼間なら使っていいですよと。この場を貸してお話をしてもらって、ちょっと慣れてきたらコレクションを真ん中に置いて、その絵に対して意見交換しながら皆さんで話してもらうとか。最初は小人数でもいいので、少しでも心の負担を理解してくれていればと思います。普段は介護施設でやっていることを美術館で行う仕組みとかをつくる。既に横の連携ができている八戸市だったらできると思います。このような一見地味なことでも長く続けていくと、絶対何かが生まれると考えています。
私の周りでも、その当事者同士でお話をする会が定期的にあって、私も聞いたりするのですが、感銘を受けることがたくさんあります。これは認知症だけじゃなくて、精神障害者の方たちや医療的ケアが必要な子供の親御さんとか、そういう親御さんたちが話し合うのは、むしろ病院で行われるよりも、このような場所で行われた方が色々な意味で良いし、広がりがあります。
文化のまちづくりプランに「ホスピタルアート」とありましたが、病院に行って何かをやってやるという感覚を捨てないと、本当に彼らが欲しているケアにはならないだろうと思う。その人たちの主体的な活動が美術館ならすごく良い環境でできると思いますので、その環境づくりと小さな縁を作ってもらうということから始めると、すごく先端的な何かが出てくるのではと思います。
皆さんの企画はとても素晴らしいので、もし平日の利用が問題なのであれば、皆さんの労力を割かずにできることかなと思ったので申し上げました。以上です。

◆委　員：私は、大学で文化政策やアートマネジメントという文化事業をいかにして作るか、「芸術」という全ての人が好きなわけではないものに対して税金を使う、という非営利の論理を成り立たせる、21世紀の公的な文化機関のあり方はどうあるべきか、というようなことを教えており、こちらの美術館でも何人かの教え子の学芸員を雇っていただいております。物としての美術作品の管理というより、人を繋いでいくコトとしての役割に注目した文化活動を専門に取り扱って学生たちに実践な教育をしております。八戸市でもいくつかのアートプロジェクトと呼ばれている、専門文化施設ではない場所と日常の暮らしに近い所、美術館とかコンサートホールには私は関係ないと感じている方々と、どのように一緒に文化事業をやっていけるかということを、もう10年近く関わらせてい

ただいて、そうした活動を通した政策的な意図の一つの集大成の形として美術館にも関わらせていただきました。まだそうした序章とも言えた「はっち」ができてから、美術館ができるまでの間に、八戸市が様々な形で取り組んだ新しい文化政策の形を具体的にどう反映されていくのか、というところが非常に関心のあるところです。
箱が大きいし、箱モノはできてしまうとその中身を埋めることで精一杯になってしまって、街へ出ていくことにどうしても手が及ばなくなってくる。それが常なので、心配はありますが、オープニングの「ギフト、ギフト、」は素晴らしい面白い展覧会で、本当に日本中の専門家にも見てもらいたかったし、訪れた方々が楽しめる、皆さんが驚くようなフックが沢山仕込まれていた。今日のお話を聞いて、若い世代であまり美術館に先入観のない世代の人たちが「面白いな」ってお話しされていたようでとても嬉しく思いました。
また、建設準備室時代から、バブル時代の美術館のような、一点豪華主義の何億円かをかけて名作を買って、それで集客しようというあざとい方式で、30 年後の今日、全く成功していないという美術館もありますが、そうしたことをせずに、何らかの地域文化を反映しているコレクションをどのように見せていくのか、ただ作品を並べるだけでなく、モノを並べる美術館からコトにするのが非常に重要だと再三申し上げて参りました。
今回の「モノガタリ」というコンセプトは素晴らしいし、最後の担当学芸員のお手紙コーナーには心底感動いたしました。美術館の役割である歴史の縦軸もきっちり押さえているし、まだ存命の方々の語り、そしてまた学芸員の顔がもの凄くよく見える。 今の時代の人たちとどう繋がるのか、という同時代的な横軸も見事に捉えていて、美術館の美術館たる新たな使命をすごく意欲的に出していて、とても良かったなと思います。
プロジェクトに関しては、確かにコンセントが多く、こちらから何か押し付けるのではなく、いろんな方に使っていただいて 情報収集していくというのは、よろしいかと思いますが、それだけだと、ただの公民館になるのではと懸念しています。この美術館が仕掛けるアートプロジェクトの予定が無いことが残念かなと感じてしまいました。
直近のプロジェクトのきむらとしろうじんじんさんは、人当たりも良いし、参加された方々は特に楽しいと思いますから、それはきっかけとしてとても良いと感じますが、もうちょっと仕掛けても良いかなと感じます。吉川委員がおっしゃった、色々な方々に何か押し付ける形ではなく、ここを利用してもらうという素晴らしいアイディアだと思いますが、その運営側にその方たちのニーズを感じ取る担当者がいなかったら、ただの場所貸し、無料会議室になってしまうのが、ジャイアントルームの利用方法として心配なところです。
コロナ禍で八戸に来られないうちに「美術館」という名前に決定していて、大変ショックを受けました。この美術館の最初の構想は、それなりにイケてる美術館の機能を一部含んだアートセンターとする構想だったのに、どうして「八戸市美術館」という名前になってしまったのか。「美術館」という言葉を聞いて、通常美術館に期待するイメージを裏切ってないかなと心配してしまいます。
先ほども申し上げたように、21 世紀の美術館として素晴らしい企画を既に２つも放っているのは誇っても良いと思いますが、「美術館」という名称は、本来の一部美術館を含むアートセンターであるという、「名は体を表していない」状態に今あると考えています。また、アートセンターとして機能するための専従スタッフが現在いないので、アートセンターの役割が少し足りていないと感じています。
もちろん、コレクションをしっかりと感じていただく展覧会を作っていくことは重要なのですが、展覧会に時間が割かれていれば、アートセンターの役割が疎かになってしま

うのでは、というところが心配ごとでした。以上です。

◆委　員：私は、「新しい美術館が欲しい」という運動をしてきた。副館長と最初にお会いした時に、「美術館の種を撒きましょう、八戸の芸術のために種を撒きましょう、その種を育てていきましょう」という話をしました。実は、今年私も野菜の種を蒔きました。芽が出てくる喜びと楽しさは何物にも変え難い。全て文化に通用することだなと私は思うのです。育っていくところを見て、種を植えて良かったなと思いました。種を蒔けば芽が出てくる。希望を持ってこの美術館の事業に取り組んでほしい、そう思います。

今日は色々説明受けましたが、かなり量が多くて、よくこれだけできるなぁと感心しておりました。私の希望としては、誰も見たことのないような良いものを見せてほしいと願っています。それができる美術館ができたと思っていますのでお願いしたい。

昔は食べるのがやっとの時代で、文化芸術を楽しむ余裕はなかった。やっと文化芸術を楽しめる時代になってきた。私は南郷に住んでいて少し遠いのですが、知人友人を誘って　皆で楽しみたいと考えています。以上です。

◆委　員：まず、ご報告いただいたジャイアントルームでの様々な活動を聞いていて、スタートダッシュが非常に上手く機能していて、この勢いを続けていていただけたらと思いました。第 2 弾の展覧会も非常に良いと思います。皆さんの努力と色々なことを考えて行っているのだなと感じています。

非常に良くやっているということは大前提で、少し厳し目のこと言います。

それは、プロジェクトがバラ売りになっていて、若干、プロジェクトとして何を伝えたいのかよく分からないなと感じました。展覧会とプロジェクトの 2 つの柱で八戸市美術館を運営していくというメッセージが本当に打てているのかという疑問があります。

「ノルディックウォークの人たちがジャイアントルームを通り抜けてテラスに出ています、すごいでしょ」と説明したとき、「何がすごいのか？」と言われたら、何と答えるのか。その価値を言語化しないといけないと思う。

例えば、「一般の来館者の皆さんがジャイアントルームでこんなふうに過ごしていますよ、すごいでしょ。」ではなくて、「通常の美術館なら〇〇なスペースなのに、自発的に考えて自由に使われている。」とか。生まれたばかりの価値だからこそ、そこに言葉を与えて価値化させていかなければいけない。それがプロジェクトで実施すべきことであると考えます。色々なことがたくさん起こるのは良い、それをどうやって価値化させていくかという仕組みが見えなかったというのが正直な感想です。

例えば、学芸員全体で 3 年に一回くらいは本を出すと決めて、ジャイアントルームの活動を言語化させていくことを前提にプロジェクトを作っていくなど。

「美術館」というアートセンターがあって、それを真正面から本当に捉えているのかというところがちょっと疑問に感じました。

こちらから準備してあげるプロジェクトも大事ですが、それを 100 個やって、これまでの美術館を更新させていく美術館ですって言えますかと。2 本柱と言っている「プロジェクト」を言語化していくための仕組みを、構造として最初から組み上げていかないと、「プロジェクト」と名付けられたものが、だんだん展覧会に紐づいた関連ワークショップだけになってしまうのではと気になりました。先ほどの文化推進基本計画の中で「多様な主体が参加するプラットフォーム作りしていく」がありましたが、例えば教師や市民団体と 共同で取り組んでいく仕組みはどうやって作っていくのかっていう、いわゆるこちらが完全にハンドリングできる内容に若干見えるのですよね。何かを仕掛けてきて自分たちのボディスケールまで外さないぞって感じがする。 だけど、吉川委員がおっしゃったこととか、若干自分のボディスケール外れるところで連携相手を見つけて、

プロジェクトとしてやっていくのが良いのではないか。ジャイアントルームは、基本的には展示室とまちの中間領域みたいなことがコンセプトだと思うんですよね。展示室とまちを結ぶ中間領域でのプロジェクトとして、概念としてその中間領域のなかでプロジェクトデザインできるかっていうと若干疑問です。ただ、今のスタートダッシュは本当に素晴らしい。それを前提に期待を込めてという意味でお話した次第です。以上です。

◆委　員：私は地元ですので、これまで起きていたことも大体見ておりまして、すごく良くやっていると感じている。色々なことにチャレンジして、ジャイアントルームもプロポーザルから出てきた考え方でしたが、本当に上手く活用されているなと本日報告を聞いてそう思いました。

多分美術館にとって3年ぐらいは試行錯誤の時期で、色々やって、これはいける、これはちょっとまずい、とか。とにかく色々なことをやってみるのが良いのかなと思います。それは、最初の時期でないとできないことでもありますので、そういう形でチャレンジしていただきたい。学芸員の顔が見えることはすごく良いことだと思います。どこの美術館も個性的な学芸員がいて、それぞれの個性を持った展示をする、それが美術館の個性になっていく。大体役所の仕事は、あまり一人一人の職員の顔は見えにくいのですが、美術館はそうではなくて、学芸員の個性が前面に出た方が、面白いものが絶対にできると思いますので、事務方の皆さんが見守って育てていくような形でやっていただきたいなと思います。

あと、アートプロジェクトについて、20 年くらい前に結構青森県内でアートプロジェクトが盛り上がった時期があって、大きなきっかけの一つは弘前で奈良美智さんの展覧会を地元ボランティアだけで立ち上げたことがあって、それと前後して、県立美術館や国際芸術センター青森ができて、様々なプロジェクトをやり始めた。そのときに、森司さんやきむらとしろうじんじんさんとかも青森県に来たのではないか。そういう形でかなり多くの市民、地域を巻き込んだ時期がありました。ACAC でその時作られた「エアーズ」というボランティア組織ができて、アーティストたちの旅館を世話する、買い物とかのフォローをしてあげるとか色々な形でサポートする市民の方たちがいて、プロジェクトは支えられてきた。今では世代交代に悩んでいるみたいですが、これからアートプロジェクトを仕掛けていく、継続的に進めていく上では、積極的に参加していただけるボランティアの方々を育てていくということがすごく大事だと思います。先ほどのエアーズは、リーダーになる人がいて、自立した団体として独立したプロジェクトもやっていました。この美術館では「アートファーマー」という存在になるのかと思いますが、アートファーマーを育てていく試みとして、何かプロジェクトを考えると良いのかなと。

次に馬場のぼる展ですが、県立美術館でも 10 年ぐらい前に展覧会をやりました。色々な年齢層に人気があって、若い方から子供がいる年代、小さい頃絵本を読んでいた方もいますし、もっと言えば手塚治虫と一緒にあの少年漫画を書いていた頃に読んだことがあるっておじさんがいたり。結構色々な切り口がありますので、これまで美術館に来たことのない方々を美術館に呼ぶ一つのチャンスになると思います。あまり美術館に来ない層というのが一定数いるのですが、そういう方たちにどんな展覧会に来たことがあるか聞くと、ジブリ展とか。テレビでやっているような企画の大きな展覧会に来がちなのですが、とりあえずまずは一度足を運んでいただく機会にしてもらえればいいなと思いますので、馬場のぼるさんの集客力を活かして、沢山のお客さまに来ていただくきっかけになれば良いかと思います。私からは以上です。

◆副会長：皆さんから様々なご意見・コメントを聞いて、私が感じていなかったことも沢山あるのだなと思いながら伺いました。私は、地元にいる 1 人として、私の思うところをお話し

たいと思うのですけれども、資料 3-1 の冒頭、他の委員も関連のことをお話されていましたが、来館者層の拡大を考えていくこと、これがこの仕事を携わってからずっと考え続けておりました。地域に住んでいて色々な方々と話をし、家内の友人関係とか様々な場面で、美術館とか中心街の施設の話が聞こえてくる。 そのときに思うことは、地域性というか、「美術館は見に行かないよ」というグループ、それから「一生懸命やっている。素晴らしい。」というグループに分かれる。同じ税金を払っていますので、様々な方にこの美術館を愛していただきたいと思うわけです。

今日、様々なプロジェクトのご説明いただいて、学芸員を始めスタッフの皆様が一生懸命考えているなと感じました。特に、今言った観点で来館者層の増大・拡大というところでです。ジャイアント食堂・広場の活用企画ですとか、色々なきっかけを作ることに繋がるのだろうなと。ただ、ここでプロジェクトが行われていた、ということだけであれば駄目で、新たな仕組みが必要だろうなと考えております。

手前味噌で恐縮ですが、私が勤務する八戸工業大学の話が出ておりましたが、若干紹介させていただくと、本学の 50 周年を迎えておりまして、10 月 22 日に祝典・祝賀会を想定しておりまして、その前後合わせて 1 週間程度、 美術館の借りられるところ全て借りることにしておりまして、学園祭を街でやろうと考えています。既に学生が企画を練っているところで、本学の教職員・学生が沢山街にやってくるという企画でございます。学園祭ですので当然模擬店の出店や音楽演奏とか予定になっております。美術館を大きく借りて、ここで一体何ができるのだろうか、そう思いながら、今日ここに座っています。約 1 週間に渡り、街に本学が登場するのを市民の皆様にも感じていただきながら、美術館とうまく繋いでいければ良いかなと思っているところです。

もう一つ、「ばんラボ」という施設が美術館の真正面に開設したのですが、美術館と同じように火曜日以外は開いておりまして、教職員又は学生が常駐しているという形をとっております。公開講座や 20 人程度が利用できるサイズになっておりますので何らかの形でお使いいただければと思っています。美術館で行われている様々なイベントに関連する企画を立てて、美術館とばんラボを回遊するような試みができれば良いなと考えています。美術館と連携を深めながら、活動を推進できればいいかなと思っています。

あと一つ、何回か話題に出ていましたが、モノガタリ展の篠原学芸員のモノガタリカード。書かれている内容を読むと、今私達が「知りたいこと」が書かれているのではと思いました。来館したのは初めてだったとか、こういうモノに感激したとか、幅広い年齢層の方が多く書かれていたっていうこと、今後の美術館の運営に有益な情報があると思うので、きちんと吸い上げていかなければならない。ただ、はみ出して貼ってあるのが勿体ない感じがしたので、何かが行われているということが明確に分かる形が大事かなと思いました。コピーしたものを館内のどこか目に触れる場所に置いて、アートに対する気持ちを膨らませていってください、のような仕掛けができれば良いのかなと思いました。

◆会　長：ありがとうございました。各委員からご意見いただきました。委員からのご意見、美術館、アートセンター、アートプロジェクト、展覧会、様々なキーワードがありました。最初に説明していただいた、文化のまちづくりプランが一番のベースになっているかと思います。八戸のまち、文化のまちづくりビジョン、それを作っていくために今我々は色々アイディアを出して実践しているところかと思います。美術館っていうものを作るっていうことが、それが目的ではなくそれは手段であり、その美術館という役割もやはり時代とともに様々に変容してきています。各委員からお話のあったジャイアントルームというのは、他にはない施設であり、一番の大きなあの機能を果たせるこれまでいな

い役割を果たせる一つの空間になっているかと思います。展示室の中からはみ出ていく、まちのモノがジャイアントルームに染み込んでくるという、まさにそういうものが融合できる空間として、それをどうプロジェクトにしていくのか、言語化していくのか、きちんとそれを見渡して吸い上げて、ディレクション、キュレーションをかけていくのかっていうようなことが、各委員から出ておりました。とはいえマンパワーがあります、時間も限られており予算も限られている。 そういうものをきちんと無理なく今あるものを活用するという知恵も出しながら、展開していくことが求められていること。我々もそれぞれの立場から意見を伝えていくのが、この会議の役割だと思っておりますし、美術館がスタートして、目の前の作業に追われて、最初に考えていたビジョンってなんだっけ、ということはありがちな話です。しかし、はちのへ文化のまちづくりプランを策定したときに掲げた大きなビジョン、これが実践できれば、日本中・世界中からどうしてそれができると注目される、世界に無いものになると思います。しっかりビジョンを持って進んでいければと考えています。事務局から何か連絡事項はありますか。

〇事務局：本日は、沢山のご意見いただきましてありがとうございました。我々も、オープンして半年、新型コロナの対応など、美術館の業務以外のこともあり、これまで何とかやって来たというのが正直なところでございます。様々なご意見もある中で、当初想定していたできたこと、できなかったことが多々ありますので、今いただきましたご意見も踏まえながらまた改めて自分たちの事業を見直して、今後進めていきたいと思っておりますので、引き続き皆様の御指導御協力をよろしくお願いいたします。

◆会　長：ありがとうございました。では、以上で本日の委員会の議事は終了といたします。それでは、進行を事務局にお戻しいたします。

〇事務局：委員の皆様、本日は貴重なご意見をいただきまして大変ありがとうございました。
いただいたご意見を踏まえながら、今年度の事業を進めてまいりたいと思います。
次回の会議は展覧会やプロジェクトなど、実際の現場をご覧いただきながら、より具体的な御助言をいただきたいと考えております。次回は今年度中に開催したいと思いますので、委員の皆様には改めて日程調整させていただきますのでよろしくお願いいたします。 それでは、本日の会議はこれで終了とさせていただきます。ありがとうございました。